

Title	ホスピスケアの目指すもの：ケアタウン小平の取組み(スピリチュアル・ケア研究講演会)
Author(s)	兼松，誠
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.3, 2013.3：16-16
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4494
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

スピリチュアル・ケア研究講演会 ホスピスケアの目指すもの—ケアタウン小平の取り組み

2013年1月24日、スピリチュアル・ケア研究講演会「ホスピスケアの目指すもの—ケアタウン小平の取り組み」が開催された。講演者はケアタウン小平クリニック院長山崎章郎氏である。日本にホスピスがはじまって、約30年になろうとしている。終末期ガンの疼痛から解放されて、残された人生を人間らしく、自分らしく生きることができるようになった。山崎氏は日本のホスピスの草分け的存在であり、ホスピスの役割を考え続けてこられ、今、地域と在宅に根差したホスピスの実践に力を注いでいる。

山崎氏は、1983年にE・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』に、86年に柏木哲夫氏の著作に出会いホスピスケアに目覚めたという。キューブラー・ロスの提起を受けて、山崎氏はスピリチュアルペインの根底にあるスピリチュアリティとは何かを問う。スピリチュアリティとは何かを考えることによって、ケアの方向性も見えてくると考えたわけである。山崎氏は、本学教授窪寺俊之氏に依拠して、スピリチュアリティとは、人生の危機に直面して生きる拠り所が揺れ動き、あるいは見失われてしまった時、①その危機状況で生きる力や希望を見つけ出そうとして、自分の外の大きなものに新たな拠り所を求める機能のことであり、②また、危

機の中で失われた生きる意味や目的を自己の内面に新たに見つけ出そうとする機能のことである、と総括する。スピリチュアル・ケアとは、かかるスピリチュアリティを適切に機能させることとされる。そして、そのケアを成り立たせるのは、苦しみの最中にある人が自分の苦しみを聴いてもらい、理解してもらうという過程である。そのために、内省（内的自己の探求）効果を生み出すカウンセリング技法を活用してコミュニケーションを図る必要がある。生きる意味を見失った人が自分の気持ちを整理し、自己決定できるよう共感的に支えることがスピリチュアル・ケアであるわけだが、これこそが緩和ケアにとって最も大切なものだと山崎氏は主張する。

ケアタウン小平チームは、24時間対応型在宅療養支援診療所のケアタウン小平クリニック、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、いつぶく荘から構成されており、コミュニティに根差した在宅での看取りを支えている。遺族のグリーフケアの取り組みも為され、ケアタウン小平在宅遺族会として「ケアの木」が活動している。

安心して暮らせる地域社会は、最期まで住みたい地域社会である。たとえガンの末期であったとしても、認知症であったとしても、最期まで人権を守られ、葛藤と自立（自律）をもって暮らせる地位社会、そうした地域社会を作り上げていく基本概念がホスピスケアなのであると、山崎氏は講演を締めくくった。

（かねまつまこと 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）



ケアタウン小平クリニック院長 山崎章郎先生